研究所だより

第４５２号
２０２３年　１月１２日
発行：土佐清水市教育研究所
ＴＥＬ　８２－３０１５

“ ソソラ　ソラ　ソラ　うさぎのダンス
タラッタ　ラッタ ラッタ ラッタ ラッタ ラッタ ラ
足で蹴り蹴り　ピョッコ ピョッコ　踊る
耳にはちまき　ラッタ ラッタ ラッタ ラ ”

『 うさぎのダンス 』　童謡　1924年（大正14年）

寒中お見舞い申し上げます

穏やかで、暖かった正月。松の内もあっという間に過ぎました。各校では３学期が始まり、子どもたちも先生方も新年の決意も新たに、やる気に満ちあふれているのではないでしょうか。
暦の上では６日は「小寒」。この日から「寒の入り」となり、節分までが「寒の内」と呼ばれ、寒さが厳しくなります。
冷え込みが厳しくなるとインフルエンザの流行も懸念されますので、引き続き基本的な感染防止対策「マスク（咳エチケット）、手洗い、うがい、３密回避、体調管理」に留意しながら過ごしましょう。

不安と緊張こそ成長のきっかけに

（「指導と評価」１月号）
平山 祐一郎教授（東京家政大学）

●なぜ英語で表現するのか

小１プロブレムという言葉が世に出たと思ったら、中１ギャップ、そして高１クライシスと「１年生」をめぐる問題状況を表す言葉が次々と登場した。なぜ英語を使って表現するのだろうか。ジーニアス英和大辞典（大修館書店）を頼りながら考えてみる。プロブレム（problem）は問題、難問である。ギャップ（gap）にはすき間、欠落、隔たり、不一致といった意味がある。クライシス（crisis）は重大局面、難局、重大な分かれ目を意味する。
勝手な推測であるが、可愛いはずの小学１年生が、言うことを聞かない、落ち着かない、けんかが絶えないというのは、小学校の教師から見れば大問題であったのだろう。まさに小１プロブレム。
また、同じ義務教育でありながら、小学校から中学校に移行しただけで、学校になじめない、不登校になる、いじめが多発する、勉強についていけないなどの事態が生じることは不思議である。そこには、見えないすき間があり、小学６年生の一部はそこにつまずいてしまう。中学教師からみれば、それこそ中１ギャップである。
義務教育が終わりせっかく高校生になったにもかかわらず、通学範囲の広域化で友人関係を作ることが難しく、不適応・不登校を起こしてしまう。高等学校は義務教育ではないので、退学にいたることも深刻な問題となる。まことに高１クライシスとしか呼べない状況である。

●小１プロブレム

小学１年生といえば、「１年生になったら」という歌があるくらい楽しみにされている学年。ぴったりの修飾語はCMフレーズのとおり「ピッカピカ」である。そんな子どもたちに起きている問題はぜひ slove（解決）が急がれなければならない。いままでのところ、幼稚園・保育所・小学校（幼保小）連携がその解決に寄与しており、さらに現在、文部科学省により「幼保小の架け橋プログラム」が進められている。問題発生当初にあったように、「幼児教育の自由保育のせいだ」とか「子どもたちの発達状況を考慮しない小学校のせいだ」などの原因論に力点を置かずに、義務教育の学びの理想型にどれだけ子どもたちを近づけられるかという未来志向の議論が進んでいくだろう。

●中１ギャップ

思春期まっただ中の中学校時代は、そもそもとかく問題が多いものである。しかし、入ったばかりの１年生に特有で重大な問題を生じているならば、対策を急がなければならない。gap を埋めることを、bridge a gap と言うそうだが、欠落を渡る橋が求められているのだろう。中学校は小学校とはそもそも違うものだということを、小学校の高学年くらいから明示的に伝えていくことが大切なのかもしれない。
中１ギャップの問題の一つに人間関係ストレスがあるという。小学校では児童は地域の身近な仲間集団と、そしていつも同じ先生（学級担任）と過ごしている。しかし、中学校に入れば、学区が広がりより多様な仲間と過ごす。そして、教科ごとに先生が変わる（教科担任）。そのため人間関係に疲れが蓄積してしまうのだろう。
今後、小学校の高学年の授業を中心に教科担任制が広がっていけば、いろいろな先生から教えてもらう経験を児童は積んでいくだろう。そうすれば中１ギャップの問題が一つ減るかもしれない。また、小中接続の円滑化や中１ギャップの解消に向けてあえて小・中を一貫校化する動きもあるが、そこまで大きなことをしなくても、小学校の先生が中学校で、中学校の先生が小学校で授業する機会があれば、児童にとっても教師にとっても相互理解が進み、中１ギャップは解消の方向に進むかもしれない。

●高１クライシス

高校時代は子どもにとって厳しいものである。多くの生徒は学力選抜を経て入学するので、均質な集団になる。その中では、ちょっとやそっとの努力で自分の能力や個性を発揮することは容易ではない。また、入学した高校によってある程度見えてくる進学先・就職先候補から、自分のその後の人生が否応なしに想像できてしまう。自分のアイデンティティを形成する時期であるからこそ、自分の可能性と限界を現実的に考えて、自己を統合していかなければならいつらい時期である。
Problem は solve され、gap には bridge が架けられる。では、crisis にはどんな言葉があるだろうか。あえてあげれば crisis management か。Solve や bridge が解決に向けた力強い言葉であるにもかかわらず、manage には「なんとかやっていく」というニュアンスを感じてしまう。でも、それはそれで当然なのかもしれない。高校生ともなれば最終学年で成人に達する。
大人がかかえる問題にはたいてい唯一の正解はない。したがって、management でよいのだろう。であるからこそ、小１プロブレムや中１ギャップに比べて、高１クライシスに立ち向かうためには、生徒も教師も知恵を働かせて、なんとかする、なんとか切り抜けていくしかない。

●「関節炎」の治し方

幼稚園や保育所から小学校に行けば小１プロブレム、小学校から中学校に入れば中１ギャップ、中学校から高校に進学すれば高１クライシス。大学に勤務する身としては、「大１～」（～はもちろん英語）などといった言葉が発明されないことを祈るばかりである。
このように日本の教育制度には節々に痛みがある。「日本の教育は関節炎にかかっている」と言う人もいるくらいである。そして、その炎症を鎮めるためにさまざまな工夫がなされている。それがうまくいくことで、児童生徒、教師、保護者が幸福になる。
しかし、物事には限度がある。学校間の接続を滑らかにしすぎてしまうことは、成長のチャンスを逸することにもなりかねないからである。進級や進学には不安や緊張を伴うのは当たり前である。ある程度の不安や緊張があればこそ、それをバネに人はグンと成長するのである。１年生というフレッシュさは不安や緊張が醸し出しているとも言えるのである。

（高知県心の教育センター　Ｑ－Ｕに関する資料より）

「ふりかえり」から「来年度」に向けた計画を

～ 不登校予防・支援のための年間計画の作成について ～

不登校に対する取組は、次の３点を同時に進めていくことが必要です。
①再登校　②安定登校　③予防・早期対応

この中でも、特に大切な取組は、③の予防・早期対応であるということは言うまでもありません。予防の中心は、学級経営であり、毎日毎時間のよく分かる楽しい授業です。早期対応の中心は、日常観察・面接・検査等による取組です。特に、学校３大ストレスと呼ばれる「①友人との関係、②学習の定着、③先生との関係」をどのように向上させていくのかが大きな鍵を握っています。

そこで、今回は３月末までにしておくこと、そして、来年度の不登校予防・支援のための年間計画作成に向けたポイントと作成例についてお知らせいたします。

１　３月末までにしておくこと

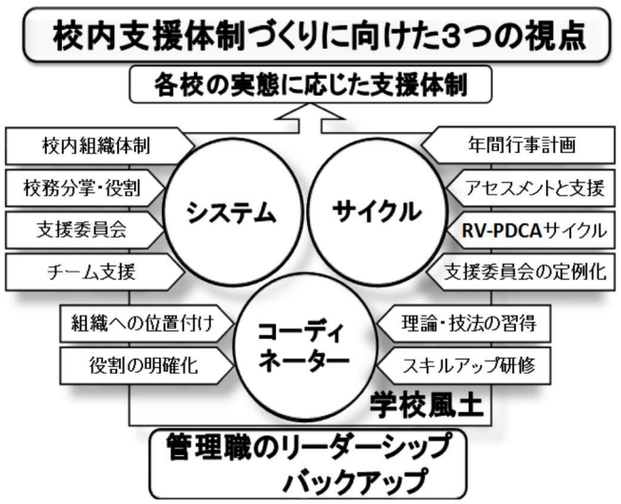
(1)　子どもとの信頼関係をつくるチャンスです

年度末は、子どもたちや保護者との信頼関係を再構築する大きなチャンスです。休んでいた子どもの中には、年度末の２～３月にかけて、再び登校を始めたり、学校に来る日数が増加する子どもたちがいます。その子どもたちについては、学校に来ている時のかかわりを大切にします。学校を完全に休んでいる児童生徒には、継続的な家庭訪問や保護者面接等のかかわりの中で、本年度のがんばりを一緒にふりかえることが大切です。自己肯定感が下がっている子どもが多いので、小さなことでもがんばったことを認め、励ましていきます。

教育支援センター（適応指導教室）がかかわっているケースについては、教育支援センターも参加してのふりかえりをします。子どもや保護者の現状や願いを受けて、年度末から春季休業中の支援の仕方、始業式から始める年度初めの受け入れについて確認していくことが必要です。この年度末から春休みにかけての取組が大きなチャンスになります。

(2)　学校での取組、一年間のふりかえりを

まず、３月末までにしておくことは、本年度の取組の成果と課題を正確にふりかえることです。また心の教育センターが作成した『校内支援体制づくりに向けた３つの視点』を参考にしてください（資料１）。学校の規模や実態に応じた支援体制をつくることが大切です。この図は、管理職のリーダーシップやバックアップをもとに、システム・サイクル・コーディネーター（校内支援体制を推進するリーダー）の３つの輪がうまく回転し、子どもへの援助が進んでいるイメージを表わしています。



（資料１）

ふりかえりのポイント

① 教職員一人ひとりの児童生徒・学級集団に対する理解力の向上
- ○ 児童生徒・学級集団の理解にかかわる研修・職員会等での共通理解
- ○ Ｑ－Ｕの活用状況（集計結果の分析・考察からの取組）
  - ・プロット図の４群に位置する児童生徒の状況と推移
    （満足群・非承認群・侵害認知行為群・不満足群〔要支援群〕）
  - ・学校生活意欲の状況

② 予防の取組
- ○ 人間関係づくり・ソーシャルスキルの獲得
- ○ 楽しく分かる授業づくり

③ 不登校・不登校傾向にある児童生徒の現状
- ○ 欠席日数・欠席状況
- ○ 支援状況（家庭訪問・別室登校の支援等）

④ 校内支援体制やチーム支援体制の現状
- ○ 校内支援委員会の設置と早期発見・早期対応の体制づくり
- ○ 支援のシステムと年間の支援サイクル
- ○ 具体的なチーム支援

不登校状態にある子どもをチームで支援するためには、まずその子の状態を見立てる（アセスメント）とともに、支援の方向性を一致させ、具体的な対応をしていく援助チームを編成することが大切になってきます。その役割を担うのが、校内支援委員会（コーディネーション委員会）です。担任を支援する体制が機能している学校では、校内組織に位置づけられ、生徒支援委員会、生徒指導委員会、教育相談委員会等と呼ばれ、定期的に開催されています。

不登校の子の担任する教師を支援するポイントは、支援の中心となるのは担任や学年ですが、見立てや対応を担任・学年まかせにしないということです。

⑤ 校内外での連携の現状
- ○ 養護教諭・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー
- ○ 各市町村の教育支援センター（適応指導教室）等の相談機関
- ○ 心の教育センター・児童相談所・保健所等の相談機関

２　来年度の不登校予防・支援のための年間計画の作成を

ふりかえりができたら、不登校予防・支援のための年間計画を作成し、教育計画に位置づけます。

市教研各部会・研究協力校等提出物について

○教研各部会	提出締切	○研究協力校	提出締切
＊総括教研部会報告書 ＊研究集録原稿	１月２７日（金） １月３１日（火）	＊研究集録原稿 ＊決算書	１月３１日（火） ２月１５日（水）

＊「校内研究」「へき地・複式教育研究会」「特別支援教育研究会」についても原稿をお願いします。